

○集落営農法人（農）ファーム白谷では**新品目としてトマトを導入するに伴い、集落の女性達が中心となり**、栽培を担当することとなった。

○そこで、普及所は**栽培経験のない女性達が自身で管理が行えるようにこまめな巡回指導や普及所が毎月発行する栽培技術情報誌「日南トマトン情報」**で知識の習得を図った。

○その結果、**法人にトマト栽培が定着し、女性が自立して生き生きと活躍できる場が生まれた。**

具体的な成果

1 目標の反収10tを達成

■本格栽培を開始した初年度に**10.3t/10aを達成**

R3成績：反収10.3t（生産部平均：9.4t）
部会内順位：48経営体中11位

R4成績：反収8.9t（生産部平均：9.6t）
部会内順位：43経営体中17位

2 女性達が栽培技術を習得

■普及員が指導する様子を**スマートフォンで撮影し、共有することで多くの作業を女性のみで行うことができるようになった。**

■日々の作業や給液装置の使用手順を詳細に記録した**「トマト日誌」を女性自ら作成**



写真1「トマト日誌」

■チェックシートでトマト栽培の習熟度を確認した結果、**ほぼすべての項目で理解度の向上が見られた。**

3 集落営農法人へのトマト栽培定着

■**トマト栽培経験が全くなかった女性達が新たに栽培に取り組んだことで、日南トマトの栽培面積、生産者数の確保**につながった。

■法人経営（特に人件費）を勘案し、**人員の適正配置と作業時間の削減に取り組むようになった。**

■集落内の11名の女性が積極的に技術習得に取り組んだ結果、**トマト栽培にやりがいを感じるようになり、女性活躍の場が生まれた。**

普及指導員の活動

R元～R2

■**「日南トマトン情報」を毎月発行**することで技術周知を行った。

■地域内の遊休ハウスを利用し、**令和3年からの本格栽培開始に向け栽培研修を行った。**

■部会の栽培講習会や町内の生産農家を訪問し、作業を見聞きするよう提案した。

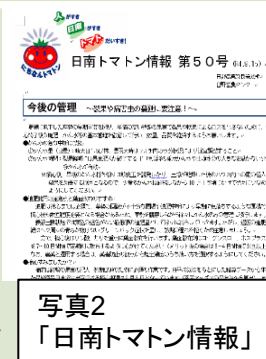


写真2
「日南トマトン情報」

R3～R4

■作付け前に**栽培講習会を開催**し、作付け後には**週に一回、責任者を通じた濃密指導**を心掛けるとともに、**人員配置についても適正化を呼び掛け**、効率的で無駄のない作業となるよう支援した。

■**栽培後は反省会を実施**し、令和4年の収量低下原因の周知とその改善策を提案した。

普及指導員だからできたこと

■**栽培責任者が抱える多くの不安について、寄り添い、励ましながら支援した**ことにより、責任者としての自覚が芽生え、作付け終盤まで女性たちをまとめ上げることができた。

日南トマトの産地強化 ～集落営農法人の野菜栽培における女性活躍推進～

活動期間：令和元年度～（継続中）

1. 取組の背景

日南トマトは、平成 17 年度以降、高齢化による生産者数の減少が進み産地存亡が危ぶまれていた。

そこで、日南町では平成 21 年度から農業研修生制度を開始し、今年度までに 18 名が新規就農に至った。

しかし近年、就農希望者の減少と離農が加速しており、産地維持のためには新たな生産者の確保が求められている。

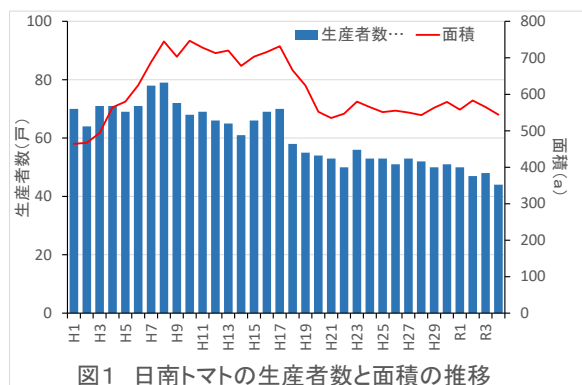


図1 日南トマトの生産者数と面積の推移

このような状況の中、水田農業維持を目的に設立された集落営農法人では高収益野菜を経営に取り込み、地域の女性をはじめとした労力を活かして経営安定を図る動きがみられ始めた。平成 26 年に日南町白谷集落で設立された（農）ファーム白谷でも水田の圃場整備をきっかけにトマトと白ネギの導入を決定し、2 年間の技術習得の後、令和 3 年度から 10.5a でトマト栽培を本格的に開始した。

2. 活動内容（詳細）

（1）本格栽培に向けた技術習得（R1～R2）

R3 からの本格栽培開始に向け、地域内の遊休ハウス 2.4a を利用して、トマト栽培を担当する女性 6 名に対して栽培研修を行った。1 年目は栽培指針に準じて一連の作業方法の理解を進めることに専念し、部会主催の栽培指導会への参加や町内の生産農家を訪問することで作業の方法を見聞きするよう誘導した。2 年目は前年の反省を基に栽培方法の改善に努めながら、適期の管理作業実施、病害防除の徹底等を指導してレベルアップを図るとともに、効率的な作業の実施を呼びかけた。

（2）女性参画の促進と定着（R3～R4）

栽培担当の女性は合計 11 名となり、栽培責任者もこの中から任命された。

R2 栽培後には普及所が栽培講習会を開催し、栽培技術の更なる定着を図った。作付け後は新設ハウス 10.5a での栽培において自主的な管理を啓発し、作業の進捗を確認しながら週 1 回の頻度で責任者を通じた指導を心がけた。人員配置についても適正化をすすめ、効率的で無駄のない作業となるよう支援した。また、栽培上の要となる養液管理、かん水管理、病害虫管理についてはこまめに指導を実施して自立を促した。

3. 具体的な成果（詳細）

（1）大規模栽培に向けた技術習得（R1～R2）

1年目は不慣れながら定植準備を行った結果、設置した通路が狭く、その後の管理作業に支障をきたす場面がみられたものの、2年目は反省を基に改善につなげることができた。

定植、誘引、芽かき、トマトトーン散布等の作業はJAの栽培指針や普及所が定期発行する栽培技術情報誌「日南トマト情報」を熟読し、ごちないながら的確にすすめることができた。

防除や養液土耕装置を使った作業はすべて水稻作業も担う男性の手にゆだねており、繁忙期以降は防除遅れから病害の蔓延や草勢の弱勢化を招いた。普及所は病害診断と農薬の提案、追肥量、養液施用間隔の調整及び葉面散布による草勢管理法などを指導し、徐々に栽培技術の理解を深めた。

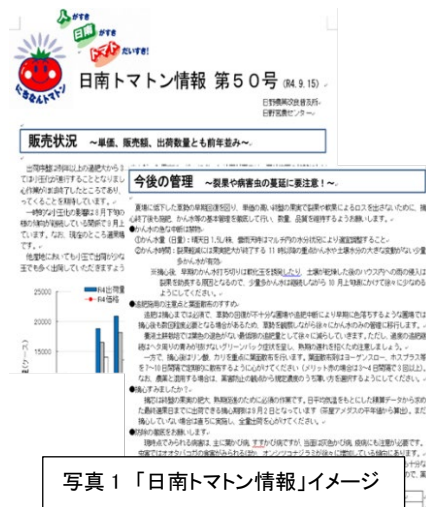


写真1「日南トマト情報」イメージ

（2）女性参画の促進と定着（R3～R4）

トマト栽培責任者となった女性は、技術面に自信がなく、作業実施に当たっての不安ごとは積極的に普及所の指導を仰ぐよう心がけた。また、作業員の大半もトマト栽培経験がほぼなく、作業に戸惑いを生じる場面が多かった。

そこで、複雑な作業の方法については、普及員が解説しながら指導する様子をスマートフォンで動画撮影して他の構成員への周知に活用するなど、女性独自の目線で不安を克服するようになった。養液土耕装置の操作についても、普及所が説明した手順を詳細に記録しておき、翌年以降に自立できるよう準備を進めた。

栽培終了後にはチェックシートで個々の熟練度を確認した。十分な技術習得ができたとは言えない状態だったが、参加者は「一人で作業するのはまだ無理だが、全員で協力して確認しながらやれば問題なくできる」として結束を強めた。

令和4年度は栽培開始当初から養液土耕装置の操作を女性のみで行い、防除、葉面散布、圃場外の草刈り作業等も習得しながら作業することができた。一方で、トラクターによる耕耘と畝立て管理機の操作のみは農閑期に男性が行う体制が整った。現在は、法人全体の経営にも注意を払う余裕が生まれ、人員の適正配置と作業時間の削減にも取り組み始めている。

このように、女性自らが栽培上の不安を一つ一つ解消し、的確な作業や積極的な技術習得に取り組んだ結果、作業員同士の協力体制はより強固となり、トマトづくりにやりがいを感じるようになった。また、自然と笑顔が生まれるようになり、法人にトマト栽培が定着するとともに女性活躍の場が生まれた。

令和3年度は反収10.3t（部会内順位：48 経営体中11位）を達成し、自立する体制が整った令和4年度は反収8.9t（部会内順位：43 経営体中17位）と成績を落としたものの、日々の作業を綴った「トマト日誌」を普及所と1部ずつ共有することで問題点と改善対策の提案に役立てている。また、作後には令和5年作の躍進を目指して反省会を開催し、令和4年作の振り返りと令和5年作の取り組みについて周知を徹底した。

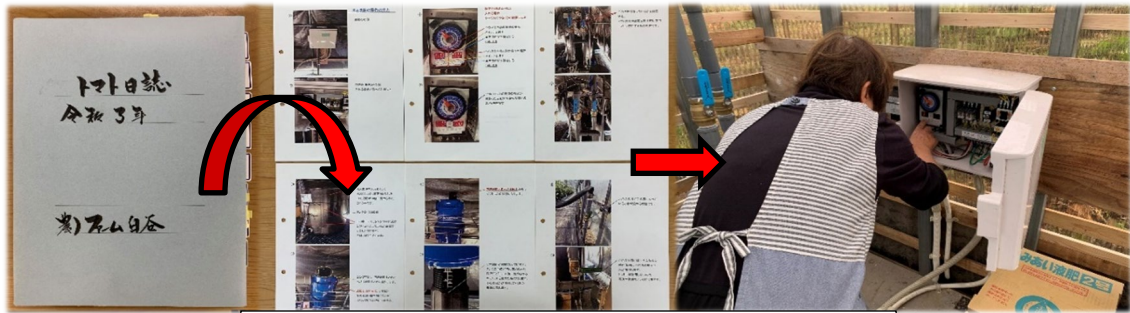


写真2 「トマト日誌」に記録した通りに養液土耕装置を操作する様子

4. 農家等からの評価・コメント（トマト栽培責任者、責任者補佐）

- ・ トマトづくりは大変だけど、やりがいを感じる。
- ・ 今まで家でじっとしていることが多かったけど、毎日仕事があり気持ちが張る。
- ・ 給料がもらえて、孫にお小遣いがあげれてうれしい。
- ・ 最初は分からないことが多かったけど、最近は分かることが増えてきた。自分で考えて作業できるようになってきて楽しい。

5. 普及指導員のコメント（日野農業改良普及所 改良普及員 吹野颯音）

生産者の高齢化により産地が縮小していく中で、新規栽培者の確保は最も重要な課題であると考えています。新規就農者への育成はもちろんのこと、本事例のような集落営農法人への働きかけや、退職就農者の取り込みなど多方面からの掘り起こし、さらには日南町だけでなく、日野町や江府町といった他地区からの参加者を募るなど幅広い担い手の確保によりトマト産地の振興・拡大に向けて支援していきたいと思っています。

6. 現状・今後の展開等

- ・ 再度の反収 10t を目指して、栽培の振返り、問題点の抽出を行い、法人としての収益増につなげる。
- ・ 地域内の未活用労力の探索や農大の就農相談会等への積極的参加を呼びかけることで地域内外の人材を確保する。
- ・ 本法人をモデル事例として他の法人に展開するため、R5 栽培後に経営分析を行う。



写真3 R5トマト定植の様子